

社会の変容に耐えられる 多様性教育のアクティブ・ラーニングの提案

明治大学情報コミュニケーション学部
准教授川島高峰

激変期と学問観の転換

- 今日の激変期と教育 高度成長期型からの脱却ということがよく言われる
 - 大学受験型の知性(より早く一つの正解を導く能力)からの脱却
 - 解のない問題に向き合う力の養成
 - 「答え」の表現方法の多様化
 - etc....
- 学問の側にも反省すべき点はないのか？
 - 学問も、高度成長期型だったのでは？
 - 高度成長期型の学問が高度成長期型の教育を行うというシステム・エラー
 - 大学受験型教養の殆どが、人工知能が普及すれば不要になるような能力

激変期と学問観の転換

- 「高度成長期型の学問」があるとするれば
 - 専門性の高度化・細分化
 - 形式要件の高度化・複雑化
 - 準備期間の長期化
 - etc..... 総じて、アカデミズムの官僚化が進行
- 専門性という名の自己保身
 - 過度な専門性の強調による分野防衛
 - 学際性への消極性
 - 細分化された世界への埋没と社会連携の稀薄化
 - 学問の自己目的化 学問のための学問化

激変期と学問観の転換

- 「高度成長期型の学問」の弊害

学士に高度なものを求めすぎている！！のではないか？ 本当は、

教養課程 → 学際・共通教養的な分野横断型教育が必要

専門課程 → 専門分野の基礎学習過程程度

博士前期 → 従来のな学部の専門課程として描かれていた教育内容

学問は何十年もかけて高度化・複雑化・膨大化したにもかかわらず、学士は相変わらずたった四年間。その結果、

学士／修士レベルの相違の曖昧化。修論並みの卒論と卒論並みの修論

教育方法の転換

- 専門性から学際性へ
- Teaching から Coaching へ
- Solution から Communication へ
- 講義型から対話型へ 参加ではなく参画

- 課題として、
 - 評価方法の改善が必要
 - 知識集約型の教育の必要性の再認識

政治学 講座概要

履修者 176名(1・2年生対象)

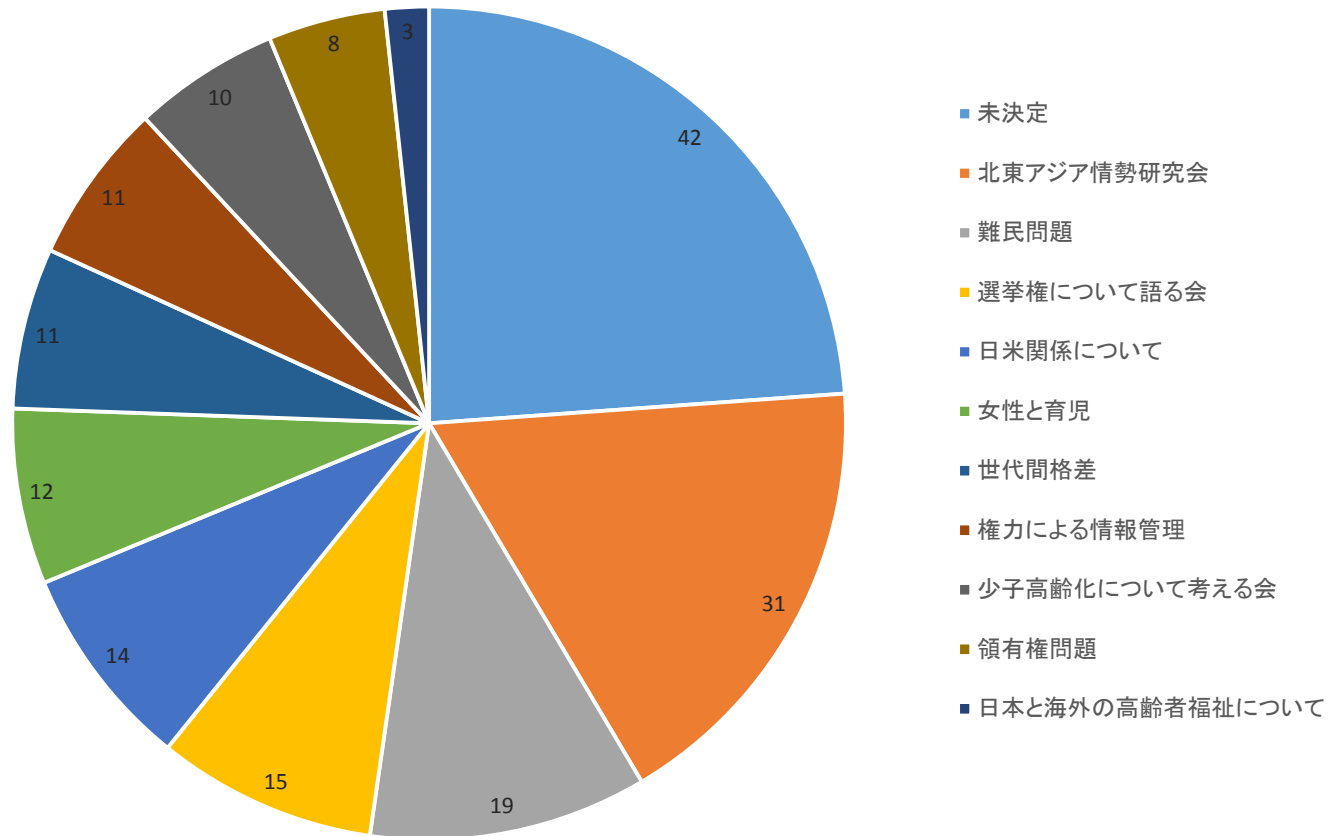
授業の流れ

1. ガイダンスとアイスブレーキング
2. 学生に政治学で取り上げたい課題をあげさせて、主題別にグループ形成
3. グループ内討議(30～50分)と座学講義(50～70分)を繰り返す
座学講義は政治学の基本概念に特化
4. ベトナムの学生との政治対話
5. 試験 各グループでの討議内容を基本概念に照らし合わせて分析した内容で報告を試験時間内に書かせる

アクティブ・ラーニング1 課題別グループ

政治学・議論してみたい主題(学生が思っている政治／政治学)

未決定	42
北東アジア情勢研究会	31
難民問題	19
選挙権について語る会	15
日米関係について	14
女性と育児	12
世代間格差	11
権力による情報管理	11
少子高齢化について考える会	10
領有権問題	8
日本と海外の高齢者福祉について	3
総計	176



正当性・権力・国家(共同体)・自由・平等・民主主義などの政治学の基本概念をあげる学生はいない

アクティブ・ラーニング¹ 課題別グループ

1. 基本概念の重要性について 学びの順番を変えてみる
2. つまり、「政治とは何か？」からではなく、
3. なぜ「政治とは何か？」を考えるのか、その気づきから入る。

アクティブ・ラーニング2 日越学生対話

- ベトナム国家大学ハノイ外国語大学 5名
- ベトナム、ハノイ大学 5名
- 10名を2名ずつ5のグループに入れて、平和・正義についてグループ・ディスカッションを実施
- 日越学生であきらかに異なっただ点は、愛国と民族意識であった
- 実施後、「あなたにとって平和とは何か、愛国とは何か・必要か、民族意識とは何か・必要か？」という問いでレポート作成